

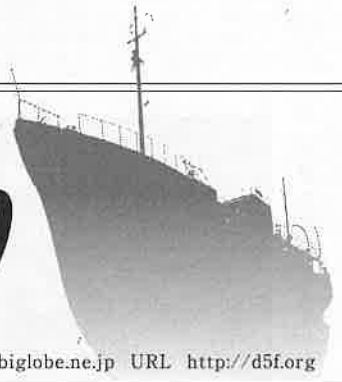
2011.03.01
No.362

(3・4月合併号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

福竜丸だより



記念のつどい市民講座は朝日、東京、NHKラジオ深夜便で紹介されたこともあり盛況でした。豊崎さんはビキニ環礁の映像も使い解説。



被災57年3・1ビキニ

記念のつどい開かれる

〈死の灰〉の拡がりを改めて考える

第五福竜丸の被災、ビキニ事件から五十七年、二月二十六日に第五福竜丸平和協会主催の3・1ビキニ記念のつどいー市民講座が開かれました。会場のスポーツ文化館研修室は立見ができるほどの二二〇人が参加。

つどいは第五福竜丸平和協会の奥山修平理事の司会で開会、川崎昭一郎代表理事が主催者挨拶のあと元乗組員の大石又七さんが「五十七年目に訴えたこと」と題して現在の心境を語りました（6めん）。

講演はフォート・ジャーナリストの豊崎博光さん。「世界遺産ビキニ環礁から拡がる〈死の灰〉」と題して昨年新たに見つかった米軍によるキャッスル作戦（54年3月～5月）の核爆発実験とその死の灰の地球規模のひろがりについての詳細な資料をもとに報告しました（講演は2～5めん）。

第五福竜丸をはじめ日本の多くの漁船や放射能雨などで

の被ばくと地球規模の汚染については当時から科学者による解析もおこなわれていたが、実験当事者が事前に世界一〇〇カ所以上に観測機器を設置し詳細なデータを集めていたこと、しかしそのヒトへの影響については追跡していないことなどが浮きぼりになり、参加者からも驚きの声がありました。

この日はビキニデーを記念して展示館のガイドツアーもおこなわれ三〇人がボランティアの案内で見学しました。春の訪れとともに

ビキニデーが過ぎると夢の島公園も急に春めいてきます。四月三日には恒例となった「お花見平和のつどい」が開かれます。被災者、空襲の被災者の証言などがあります。

今号は市民講座を収録するため発行日が遅れました。ご了承ください。

3・1ビキニ記念のつどい講演

世界遺産ビキニ環礁から拡がる「死の灰」

豊崎博光

ビキニ環礁では二三回の核実験が行われました。それは一九四六年と五四年、五六年、五八年の四年間です。そのうち最も被害を広げたのが「キヤッスル作戦」です。このシリーズでは、ビキニ環礁で原爆を一回と水爆を四回、エニウエトク環礁で水爆を一回行いました。この核実験については、アメリカ側の資料がかなりありこれらをもとに報告



活発な質疑がなされた

します。

人体実験だった

「ブラボー」のフォールアウトは、一六〇キロ離れた第五福竜丸や一八〇キロ離れたロングラップ環礁にふりそそぎました。その先にもウトリック環礁など島々があります。ちよつと想像してみてください。マーシャルの人びとは、昔もいまも「むきだし」の生活です。寝る以外は外で暮しています。そんな生活の上に、なんの予告もなく、いきなり放射能（死の灰）が降ってきたのです。

ロングラップの人びとが「人体実験だ」という、いわゆる「プロジェクト4.1」は、死の灰をあびた人たちにどのような影響が出るのかを「観察」するというものです。ロングラップでは八二人と四人の胎児が被ばくしました。これに

よる火傷が起こりどうしたか。何もしません。半数致死量の放射線をあびた人体がどのような反応を示すかを、何もせずに見ていました。人々は、痛い、吐き気がする、気持ち悪い、食欲がない……と症状を訴えているのに、治療も投薬もしない。ただ観察し、尿を採取しただけでした。

3月1日から今につづく被害

私たちは、第五福竜丸が焼津に帰港し、三月一日付読売新聞の記事によってビキニ事件の被害の、ほんの一端、始まりを知りました。二一日付の紙面には乗組員の抜けた毛髪や火傷の写真が載っています。これは火傷を負ったロングラップの少年と同じです。

ロングラップと第五福竜丸の人たちは、ほぼ同じように死の灰をあびました。違うのは、ロングラップの人たちは約五〇時間後にアメリカ軍によって救出し避難させられ、死の灰から逃れられました。しかし第五福竜丸の人たちは、三月一日から一四日まで二週間、船のなかで死の灰に覆わ

れたまま過しました。

三月一日を、いま、日本では「ビキニデー」と呼んで、平和集会などが行われていますが、マーシャルではNuclear Survivor's Day（核被害生存者を思い起こす日）として半旗が掲げられ大統領も出席する集会が行われます。しかし、被ばく者が出てきて証言することは、ほとんどありません。

ウトリックでは、二世、三世の子どもたちに被害が出ています。ビキニ環礁の子どもたちも同様です。

ビキニの人たちはキリ島に、エニウエトクの人たちはウジエラン島に移住させられました。しかし、キヤッスル作戦の死の灰は広範囲に及び、実験場から遠く離れた両島住民の移住先も汚染しています。

そのことを明らかにしたのがこの資料です。一九五五年に作成され機密扱いとなつて四〇年経つた九四年にようやく公表されました。当時は膨大な量の資料が一举に出されたためマーシャル諸島政府がこの資料を入手したのは九七年のことです。

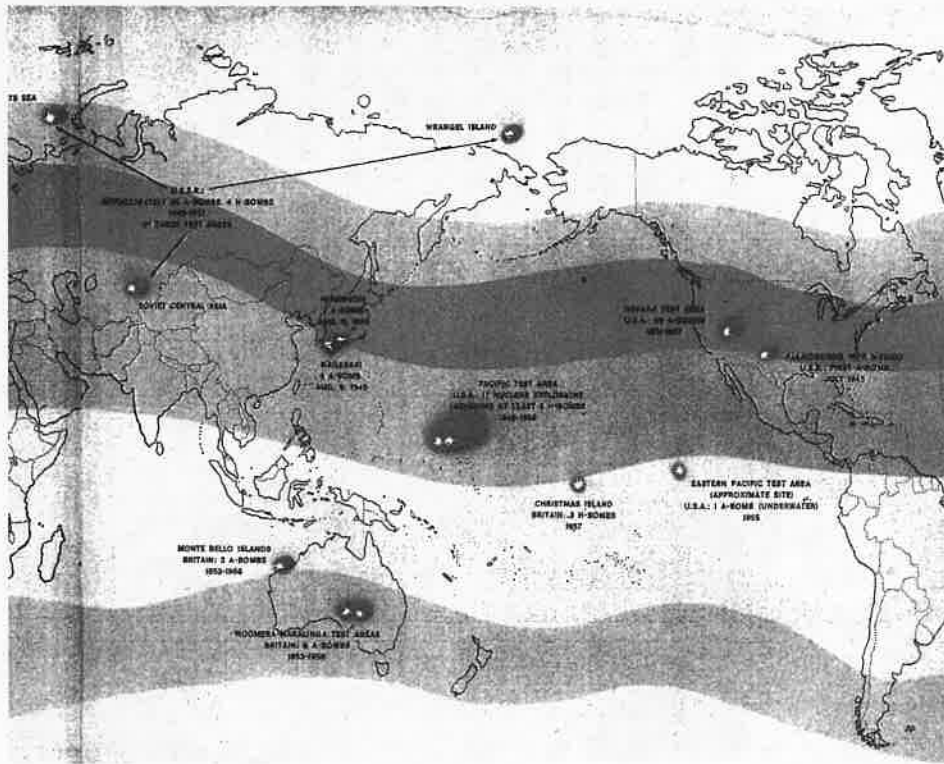
そこには、「核実験の被害はロングラップとウトリックだけ」というのは嘘である、被害はマーシャル全域に及んでいてキリ島や最西端のウジエランも被害をうけたとあります。さらに隣のミクロネシア連邦のポナペ島やコスラエ島にも流れていたと書かれています。

一九五四年三月二九日付の朝日新聞に、東大医学部外科の清水健太郎氏が「灰は高いところを西の方から飛んできて、逆に東の方からくる風によって、降下する際に反対側に吹きつけられた。多量の灰がかなり遠方まで行ったことが考えられ、遠くアメリカ本土にも達していると考えられる」と書いています。

この予測を裏付けたのが、レポート「World - Wide Fallout from Operation Castle」です。

世界規模の放射能測定

ここにある「LIFE」の五七年七月二一日号が「核時代の脅威」を特集しています。その中に「放射性降下物の危険」(3めん上につづく)



(2めんからつづく)
 と題した図が入っています。これは五六年時点での放射能の流れを描いたものです。アメリカ原子力委員会(AEC)のメリル・アイゼンバッド博士が説明しており、世界地図が貼ってあります。地図は、ストロンチウム90(Sr 90と略)が世界中

にどれだけ積もったかを示しています。(左図)
 五七年にアメリカ議会で「死の灰」について、市民が心配をはじめ、議員もうごき、科学者を呼んで初めて公聴会が開かれました。
 アメリカが放射能の測定を始めたのは、ネバダ実験場で

核実験を始めた五一年一月一日です。死の灰が全土に流れる可能性があることから、測定設備を置いたようです。
 測定方法はガム・フィルムとよばれる粘着テープで、ハエ捕り紙のようなものです。降ってきた灰を吸着させ、その紙を回収してSr 90を測定したのでです。
 世界各地に測定網を設けよと命令したのが、アイゼンバッド博士です。そして世界各地の一一カ所に粘着フィルムと固定式の放射線測定器を設置しました。
 ついで五二年一月一日、エニウエトク環礁で世界最初の水爆マイク実験を行う前に「死の灰」が世界中に広がる可能性を考えたのです。
 ところで、こちらの報告書を作ったのは米海軍です。海軍は実験のたびに飛行機で測定をしました。クエゼリン島を中心に核実験の翌日島々の上を飛んで放射線量を測る。サーベイメータで島々の上空高度60mの放射線量を測りました。マーシャルだけではなくグアム島を中心にマリアナやパラオ、オアフ島を中心に

ミッドウェイなどとギルバート諸島まで太平洋全域を飛んでいます。
 これにより「死の灰」がマーシャルの島々だけではなく、マイクロネシアにも流れたことがわかりました。また粘着フィルムによって米国内をはじめアジア、インドまで飛んでいたことも判明しました。
 日本で観測地点となったのは、三沢、横田、嘉手納、広島と長崎のABC、そして硫黄島です。
キャツスル作戦の死の灰
 キャツスル作戦の水爆実験の影響を見ていきましょう。最初のブラボー実験の死の灰は、実は日本にはあまり届きませんでした。むしろアメリカに流れています。この実験シリーズはほとんどがメガトン級でした。死の灰は対流圏を越えて成層圏に達し、世界へ流れていきました。
 ブラボーのあとに、ロメオ、クーン、ユニオン。五月五日のヤンキー実験は一三五メガトンというブラボーに匹敵する爆発威力で世界に広がる被害を引き起こしました。

三月一日にロンゲラップ島に被害があったことから、風向きを問題視して、当初の実験予定日を調整しています。その結果、ユニオン(六・九メガトン)実験の死の灰が拡がっている間にヤンキーの爆発が行われ、ユニオンの死の灰とかぶさって流れています。
 五月一〇日ごろから二〇日にかけて、東はメキシコから全米、カナダにまで入り込んでおり、西は沖繩南方海上から日本全体に入り込んでいます。
 日本政府は、五月一四日、調査船「俊鷲丸」を築地港から派遣しています。水爆ユニオン実験の死の灰が降る真っ最中にビキニ方面に向かっています。俊鷲丸の航海報告(『我ら死の海へ』)の中にも強い大気の放射能を検出していることがでてきます。
 出航直後の五月一六日には京都の雨から八万カウントという強い放射能が測定され、以後、広島、徳島、鹿児島、東京、浦和などの雨からも検出されます。つまり、福竜丸や他の漁船だけでなく、私た

(4めん上につづく)

ち自身も、日本列島にいて被ばくしたわけです。

ヒトへの影響は調べない

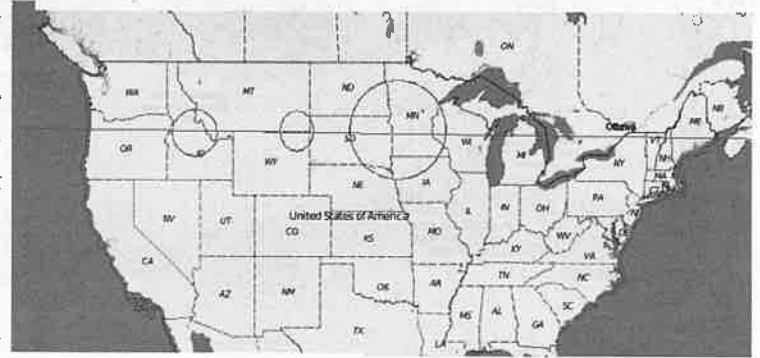
ブラボーに始まる一連の実験による健康被害などは判らないのです。全世界に測定用の粘着テープを設置し降り落ちたSr 90は測りましたけれど、人間にどういふ影響を与えたかは調査していません。

アメリカはSr 90しか関心がなかったのです。確かにそれは白血病などを引き起こしますが、他の放射性物質は調べていません。Sr 90が米国内の何処にどれだけ落ちたのかについてのデータはありません。

それはほとんど地表に降り落ちて牧草に吸収され、牛が食べてミルクに影響していません。

アメリカのTVのホームドラマで大きな冷蔵庫から大きなミルクのビンを取り出して飲むシーンがありました。当時の市民は、すごい量のミルクを飲んだと思います。

資料には、全米でどれだけ汚染ミルクが飲まれたかのデータがありますが、これがヒトの健康にどのような影響を



与えたかの調査はしていません。作られているかもしれないが、そのデータはいまのところみつかりません。

ヒトへの健康被害について一つのデータがあります。アメリカの学術研究会議のレポートで、一九五七年から六六年までの間にストロンチウム入りのミルクを飲んだ当時のアメリカ人一億八千万人のうち、おそらく二二万五千人が致死性のガンに罹ったと推定されています。

測定値より多くの「灰」が

ネバダでの実験は五年から行われ、マーシャルでは五八年まで行われたので、このデータは、両方の核実験の死の灰がアメリカに流れているために区別はできません。

分析の結果、致死的なガンに罹った二二万五千人のうち、一〇％～一五％が太平洋核実験によるものと述べています。実はもっと大量の死の灰が降ったという推測もあります。粘着フィルム（約30センチ四方）で死の灰を捉えるときにフィルムの表面に雨や雪が降ると、灰が流れてしまうため、実際には五割～二割程度しか捉えていなかったといわれています。

さらに、フィルムは集めてアメリカ本土の研究所に送るのですが、二週間位かかります。その間に半減期の短い放射性物質は消えていってしまふ。したがってこのデータで割り出した数値というものは、最小限の見積もりではないかと思うのです。

三頁の図は成層圏にまで達した死の灰が、北半球で一番

降り落ちてくるエリア、北緯三〇度から六〇度を示した世界地図です。アメリカ合衆国はほとんど覆われ、カナダも一部入っています。上の図版は、もっとも被害を受けてたアメリカ中北部を示す地図です。これは日本の気象庁の気象研究所のメンバー（青山道夫主任研究官ほか）が作ったデータで、セシウムの値で作られたものです。丸印の大きなところがたくさん放射能が降った地域で、アメリカの小麦の産地、酪農地帯で、汚染が著しいところです。ミルクの汚染に触れましたが、汚染した小麦で作ったパンが全米で食べられていた可能性ががあります。日本にも小麦を輸出していたかもしれません。

全米の被害調査の作成

アメリカは、どうして全米の汚染データを作ったのでしょうか。一九八二年に米議会で、ネバダ核実験場の風下地域の人びとに多くの被害がで

ているので調査を要請するという決定がなされ、科学アカデミーや国立ガン研究所、疾病対策予防センターなどが調

査を始めたのです。そして九七年にようやく「ネバダ実験場の核実験によるヨウ素131の影響」についてのレポートがまとめられました。現物は10万ページもあります。

しかしヨウ素だけの検討では不十分だということで、セシウムやストロンチウムの影響も調べるべきだという横槍が入り、二〇〇六年に大幅に修正されて公表されました。最終的にはヨウ素による影響だけで、一万一千～二二万一千人が甲状腺の異常をきたしたという内容です。

〇六年のレポートは、「ネバダおよび世界各国の核実験によるグローバル・フォールアウトの影響」となっており、旧ソ連の実験も含め全体を考察したレポートです。

これ以外の報告はいまのところありません。相当数のアメリカ人が被害を受けたと考えられますが、具体的な事は解明されていないのです。

太平洋の汚染調査

太平洋全体の調査レポートではハワイ、ポナペ、パラオ（5めん上につづく）

(4めんからつづく)

などの島々に放射能が降り落ちたとありますが、その島の住民にどのような被害を与えたのかの調査はありません。

一九七五年に行ったミクロネシアの島々の動物、植物、土壌の調査レポートを最近みつけました。島々の環境がどれだけ汚染されたかのデータですが、人間への影響調査はありません。ヤシやタコノキの実、サカナやニワトリを食べてどのようなことが起きたのかについて書かれています。

このレポートの中の重要な指摘の一つはグアム島が被害を受けているということです。グアムの被害については別のレポートもあり、最初の被害は五二年一月一日の水爆マイク実験だったようです。この時、死の灰は西の方角に流れ、グアムにまで達しました。レポートには、観光地として有名で海水浴場のあるタムニングやその北側のデアドという地域のタコノキの実から非常に強いセシウムが検出されたとあります。

それでは日本はどうでし

ようか。ブラボー水爆実験当時、第五福竜丸の被災を受けて四年の二月まで、全国一八の港でマグロ検査が行われました。その結果として、日本の漁船が汚染マグロをどの海域で操業して獲ってきたのかを示す地図が作られました。

この地図では、九州の南の海域での汚染魚の捕獲が顕著ですが、ここはクロマグロの産卵場所とも重なっています。ここで多くの漁船が操業しているということは、この海域に魚がたくさん集まるということですね。汚染された北海道海流もまた流れ込んでくる地域ではないかと思われれます。当時、港では魚に汚染がみつかると思われれました。

しかし私たちは忘れていたことがあります。その船に乗っていた漁師、乗組員はどうなったのでしょうか。推定二万人くらいの船乗りはどうなったのでしょうか。その調査は行われていません(注:高知県の教師と高校生による追跡調査活動やビキニ核実験被害センターなど民間レベルでの調査がわずかにある)。

もう一つ、当時は日本から

切り離されていた沖縄、鹿児島、奄美などの島々の人たちは天水を利用し、その水を飲んでいました。しかし沖縄の人たちの被ばく被害の話はほとんど聞きません。

日本本土に降った雨の影響、井戸水、飲料水、当然のことながら土壌汚染の問題があります。小川岩雄氏(故人・立教大学教授・物理学者)が、アメリカの科学雑誌「アトミック・サイエンティスト」に日本のお米の汚染について寄稿しています。四年の秋に獲れたお米からかなりの放射線が測定された。しかし、それを食べた結果についての調査報告はありません。

つまり、全国で核実験による放射能汚染を被っていないが、何故被害が第五福竜丸だけに収束してしまったのでしょうか。原水爆実験反対の世論が高まり運動が広がっていきましたが、日本人自身の被ばくを問題にすることはなぜ持続しなかつたのでしょうか。

地球ヒバクと新たな補償

新たに入手した資料からブラボー実験や太平洋全域ある

いはグローバルな死の灰の広がりについての情報がみつかりましたが、ここにはフィリピンや東南アジア、インドなどの人たちにどのような被害があったのかという記載はありません。

しかし、ハッキリしていることは、ブラボーに始まる六回の原水爆実験が最初の地球ヒバクをもたらしたということです。今年二五年目を迎えるチェルノブイリ原発事故よりはるか以前に、地球規模の放射能汚染が起きたという事実を知らずに私たちは過ごしてきたのです。

さて、アメリカは一九九〇年放射線被ばく者補償法(R E C A)の中にネバダ実験場の風下住民への補償を組み入れています。ユタ州、ネバダ州、アリゾナ州北西部などが対象地域です。実験が行われた期間にその地域に居住しており、二種類のガンを発症した人に一律五万ドルの補償金を払うというものです。

九〇年に成立後、二度改正されています。対象の病気と地域も拡大しました。それでもまだ不十分だということ

で、もつと北及び北東のアイダホ、モンタナ州なども被災地とみなす方向がでてきています。

昨年四月に六人の上院議員により提案された新たな改正法では、まだ成立していないようですが、ネバダの核実験の被災地域はほとんど全米に広がってゆくだろうといわれています。

太平洋ではグアムが対象になるので、ミクロネシアの島々(いまは独立していますが)でも補償問題が起きてくると思います。マーシャルだけでなく、太平洋全体のことにも関わってくると思います。

では日本の私たちはどうしますか。五〇年以上も経つたからあきらめてしまいい、何もしないのでしょうか。これまでの調査報告や公表された核実験に関するデータを改めて見直し、もちろん全容は判りませんが、それでも、今日につながる核被害の問題を意識的に捉えなければならぬのではないのでしょうか。

(フォトジャーナリスト/協会専門委員)

57年目に 訴えたいこと

大石又七



元第五福竜丸乗組員二三人のうちの一人大石です。

仲間の半分以上、一四人がすでに亡くなっています。働き盛りが多かった。私自身も一日三〇種類以上の薬を飲んで命をつないでいます。

私たちは、これまでひじょうに理不尽な扱いを受けてきました。被爆者としても認められず、病気になっても看てもらえないまま、仲間たちは死んでいきました。家族も悲

しい思いをしている。それが我慢ができません。黙っていてもなかつたかのように忘れられてしまふと思いました。

私は被爆者だということ隠すために、東京に逃げ出してきましたが、誰かが本当のことを言わなければ伝わらないと思ひ、話し始めました。だから私がしていることは平和運動じゃない、核兵器への恨みなんです。

「ビキニ事件」は、人類の前に「核兵器が使われたらどうなるのか」を警告した事件でした。強い武器を持つとする国の指導者たちは、実験を繰り返し、核兵器の恐ろしさをよく知っています。けれどその事実を隠して、いま私たちは核兵器に脅かされる生活になっていきます。地球上に二万発以上もあるのです。

みんな幸せそうに思っているけれども、その恐怖と背中合わせにあるということあまりにも知らない。アメリカはマーシャルで六七回も核実験をやり、その威力は合計すると一〇八メガトン、広島原爆の七千発分にもなるのだそ

新刊書評

いちだまり

『ポケットのなかの平和』
「わたしの語りつぎ部宣言」読んで

山本義彦

うです。しかも目にみえない放射能を撒き散らしました。だから、皆が被爆者になってい

先月、喜寿を迎えました。命のつづくかぎり子どもたちに伝えていきます。(元第五福竜丸乗組員／被爆者)

本書は第五福竜丸展示館で学芸員として活躍する著書の最初のエッセイ集。日常性の中で感じてきた平和の問題、あるいは平和を意識できるさまざまな事柄を、飾りつ気なしに、淡々と綴る。

常の平和を感じる一コマであることを垣間見ることが出来る。

著者の人柄を感じさせる茶目つ気さえ、不思議にも日

育が「教師」と「生徒」の分け隔ての中ではなく、相互

の学び合いを感じることから願いを実現して行くという著者の率直さにも、知ることが出来るよう。

平和博物館や展示館に関わることは直接的に「平和」を語ることであるのは間違いな

でも、声高に「平和」の主張者となる必要はないのであり、必要なことは日常の生活の中から実感される平和、そして平和への願いを心込めて生き続けること、ここに著者の本意があるのだらう。人間信頼、童話の中からも平和を感じ取る優しい感性に裏打ちされた著者の姿が映し出される。

平和に生きること、そして平和な社会こそが、当たり前であって、この否定である暴力と戦争こそ、人類社会から永遠に取り除かれるべきことである。そのためにはあらゆる紛争を、道義と人間性への信頼をもって対処することが出来れば、国際紛争は、戦争を未然に防ぐことが出来る。その点では、肩肘張らないわが「普段着の」平和を共有したいと願う。

「語りつぎ部」宣言は、体験者世代には広く好感を持たれるであろうし、「語りつぎ」より若い世代にとっても耳を傾けさせるものである。(協会理事、静岡大学名誉教授) ◇平和文化刊、A5判96頁、価一二六〇円。展示館からも郵送します。



装丁／描き下ろしイラストは、和田誠さん

連載⑦

晴れた日に
雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄



福竜丸の刻名式。左から壬生照順さん、中野さん（70年二月）

「五三年東大教授の職を捨て、その後は雑誌『平和』編集長（53・55年）また憲法問題研究会に参加（58・76年）憲法擁護の論陣を張るなど、在野の立場から鋭い発言を持續する。その剛直な反骨精神は、人間という複雑にして曖昧な存在とそれを織りなす歴

史とへの、深い洞察と寛容を伴っていた。原水爆禁止、反安保、都政刷新、沖繩返還、反核そのほか、中野は戦後民主主義運動のほとんどすべてに関与し——沖繩への関与、都政刷新などと、労作『蘆花徳富健次郎』3巻（72・74年、大佛次郎賞）の執筆が時期を同じくするなど、生涯を通じてその関心の振幅は大きく、それが中野の真面目だったと言えらるだろう」（木下順二「朝日人物事典」90年刊）。

中野好夫さんの高弟ひとり木下順二さんがこのように記すその時期に、中野さんにとっては加えて「福竜丸保存運動」があったのでした。

*

第五福竜丸保存委員会発足後、保存委員会が主催した行事の最初は、七〇年九月二三日久保山さんの墓所、焼津弘徳院でもたれた「久保山愛吉氏一七回忌追悼会」と、つづいて開かれた「第五福竜丸保存・講演と映画のつどい」でした。静岡県保存委員会よびかけ人会の協力もあり、「追悼会」に三〇〇人、「つどい」には五〇〇人ほどの参加者が

ありました。映画は新藤兼人監督の「第五福竜丸」、中野好夫さんが「日米共同声明と被爆国民」と題して講演しました。日米共同声明とは、沖繩返還を合意した前年一二月の「佐藤・ニクソン共同声明」です。ついで七一年の「追悼会」と「第五福竜丸保存・講演と映画のつどい」では、中野好夫さんが「沖繩返還協定と被爆国民」の演題で講演しています。

七三年は、静岡県保存運動よびかけ人会との共催の行事として、小川岩雄立教大学教授が「核兵器の現体系とその完全禁止への道」と題して講演しました。この「つどい」での三宅泰雄代表委員の報告はのちに「第五福竜丸は人類の未来を啓示する」と題したパンフレットになりました。

保存委員会はこの間、七三年には財団法人・第五福竜丸保存平和協会の設立となり、会長に三宅泰雄、副会長松山義夫、専務理事に広田重道の各氏があたり、中野好夫さんは顧問となります。顧問には吉野源三郎さん、朝永振一郎さんも名を連ねます。

*

七五年八月「被爆三〇年広島国際フォーラム」が開かれ、「一切の核兵器の使用は、いかなる情勢の下でも、国際法上の犯罪であり、人道に対する犯罪であると規定する」という決議を採択します。「フォーラム」の決議は、シヨーン・マックブライト氏などが提唱する「核兵器の使用は人類に対する犯罪である」とする「議定書」をつくらうという国際キャンペーンと連動します。「フォーラム」の事務局長は吉野源三郎さんでした。

「フォーラム」を契機に、核兵器の使用は人類に対する犯罪的に実証するために、広島・長崎の被爆の実相、核兵器が人類に与える脅威を明らかにする国連NGOの「被爆問題国際シンポジウム」の開催へとつながります。七六年二月NGO軍縮特別委員会（ジュネーブ）がシンポジウムに関する決議を採択、一二月には日本準備委員会が発足します。七七年二月二一日、「被爆の実相究明のための国際シン

ポジウムを前にして」の副題をもつ「広島・長崎アピール」が発表されます。上代たの、中野好夫、藤井日達、三宅泰雄、吉野源三郎の各氏による「五氏アピール」です。アピールは、求められている原水爆禁止運動統一実現の切実さを指摘し、統一の筋道を示したものでした。誠意に満ちた相互の連帯と団結こそ、被爆問題シンポジウムを前に市民の望む運動統一の方向でした。

三月一七日、運動統一の方向の交渉で曲折を重ねていた共産党・総評が追いかけるように合意事項を確認します。四月九日には地婦連・日青協も「アピール」を歓迎する会長連名の声明をだします。森滝市郎・草野信男五・一九合意、統一世界大会の開催まではすぐそこです。

かつて「媒体」の文言に固執した経過をも「深い洞察と寛容」（木下）につつんで道を拓く——東大助教時代、木下順二さんたちから「叡山の僧兵の大将」の異名をたてまつられた中野好夫さんのもう一つの真面目です。

（第五福竜丸平和協会顧問）



海外から60人余が見学

2月26日午前中、早稲田大学で開催されていた国際コンピュータ言語学会に参加した外国代表が来館、川崎昭一郎代表理事が解説し熱心に見学しました。

お花見平和のつどい開かれます 4月3日(日)11:00～15:00

「なくそう核兵器 ついでについでで東京から平和を…“あの日”からあしたへ…」と題して、つどいが展示館前広場で催されます。福竜丸のエンジンが夢の島に展示されたことを記念して植樹された八重紅大島桜の下に、運動にかかわった市民団体がよびかけたもの。今年は被爆者や空襲被害者の集団証言と映像で「あの日から」をたどります。どなたでも参加できます。

丸木美術館「第五福竜丸事件 ベン・シャーンと丸木夫妻」

埼玉県東松山の原爆の図丸木美術館で現在、第五福竜丸に関する企画展が開かれています(4月9日まで)。

3月5日には福竜丸元乗組員・大石又七さんと詩人のアーサー・ビナードさんのトークがあり70人が参加、3月26日には展示館からのお話もあります。第五福竜丸平和協会からは展示パネルとベン・シャーンの素描7点を提供しています。

目黒区美術館 「原爆を見る 1945-1970」

原爆の惨禍、ビキニ水爆実験と原水爆禁止運動の高揚などのなかから作りだされた美術作品を集めた展覧会が開かれます(4月9日から5月29日)。

1945年から70年までに発表された絵

画・彫刻・写真などの作品をとおして、被爆・核と向き合う作家たち、原爆が戦後の日本人に与えた影響を見つめます。協会からは原水爆禁止運動や原水爆世界大会のために制作されたポスターやパンフレットなどのグラフィック作品を展覧しています。

◇展示館日誌◇

- ・1月23日 沖縄県平和祈念資料館より 永山清主査・慶田盛さつき学芸員と、沖縄国際大学鳥山淳准教授が来館、視察しました。
- ・2月8日 第五福竜丸(第七事代丸)建造の地、和歌山県串本町より、田嶋勝正町長と教育委員会生涯学習課の谷口淳副課長、山崎幸三主査が来館。
- ・2月17日、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の森田隆館長、坂口真一課長が来館。
- ・2月19日 NHKラジオ深夜便に安田和也事務局長出演。「ビキニ環礁が世界遺産に」と題してマーシャルの核被害や第五福竜丸についてインタビューを受けました。
- ・3月5日 調布東部公民館平和フェスティバルで市田真理学芸員講演。

来館者の感想文より

◇マグロ漁の本でこの事件を知りました。この船が語りかける事実は、冷戦時代の狂気であり、人類への警告です。(神奈川・37歳)

◇いままで原爆のこととかよく知らなくて、どうでもいいと思っていたけど、第五福竜丸のことを聞いてやめたほうがいいと思った。(静岡・12歳)

◇心にひびいてくる平和は大切だと思った。(千葉・12歳)

◇この現実を少しでも停めるためにも反核の意思表示をしないと、次世代の生命の安全のためにもアクションを起こすべきだと思いました。(江東区)

お知らせ

特別展「イケナイ世界遺産」は好評につき会期を4月3日まで延長いたします。

パンフレット「BIKINI MEMO」を発行しました

特別展「イケナイ世界遺産ビキニ環礁」の展示とこの展覧会のために黒田征太郎さんが描き下ろして下さったイラスト作品12点により構成されたパンフレットを作りました。ビキニの人たちの流浪の生活と苦しみ、人々の声を紹介しています。黒田さんは、ビキニの人々に思いを寄せ、核実験のおぞましい破壊を意味深いタッチで描いています。一部600円(送料込)。

B5版36頁。ぜひご活用ください。

ユネスコの雑誌「世界遺産」 に第五福竜丸の紹介刊行

日本ユネスコ協会連盟が、毎年の世界遺産を紹介する雑誌・特集号「世界遺産年報2011」がこのほど刊行されました。昨年登録されたビキニ環礁についても「負の遺産という言葉一考ること」(稲葉信子筑波大学)と題する評論文、「ビキニ環礁核実験場—戦争と平和のパラドックス」(ジベ・カブア・マーシャル諸島駐日大使)などが寄稿しています。第五福竜丸の紹介も掲載されています。一般書店で購入することができます。

「ビキニ事件最新資料集」発行 高知県太平洋核実験被災支援センターが、ビキニ「死の灰」に関するアメリカの資料「キャッスル作戦の放射性降下物記録」の翻訳と高知県の被災漁船第五福丸の元操機長長の「日記」一被爆したことを跡付ける記載がある一を収録した資料集を発行しました。

A4判46頁500円(送料100円)。



◇このたびの東北地方太平洋沖地震の被災者の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。